自然神学の「幸福な世界」

——19世紀前半ブリテンにおける神学的経済社会把握——

有　江　大　介

「失敗など［神の］デザインにはありません．色々あっても結局のところ，それは幸福な世界［a happy world］なのです．大気，大地，そして水には喜ばしい生き物が満ちているではありませんか．」

ウィリアム・ペイリー『自然神学』第XXVI章「神の善性」

I　はじめに

ヴィクトリア時代（1837-1901）中期の始まる1850年代の末頃までには，キリスト教の『聖書』の記述を文字通り信じる人々は，少なくとも信者を自認する市井の普通の人々の中にはほとんどいなくなったと言われる（渡辺，1984，77-78頁）．しかし，そのかわり人々は，人間を始めとしたあらゆる生物の精妙な作りや秩序だった生態，ニュートン（Isaac Newton: 1642－1727）によって示された天体の法則的な動きなどを，自然の中に示された，目的を持った神の設計の現われと見ることで（デザイン論［argument from design］），究極の造物主としての神の存在を自覚していた．デザイン論によるこうした考え方は，神学的には預言や奇蹟を基礎とした啓示神学に対して自然神学［natural theology］と呼ばれる[1]．また人々は，世界が6日間で創造されたとは思わなくても，自分たち人間は造物主によって万物の霊長として特別に創造された存在であるという考えを，幾分かの心地よさとともに受け入れていた．自然界の階層的秩序観と密接に連関したこの考え方は特殊創造説と呼ばれる[2]．

科学が時代の合言葉となっていたヴィクトリア時代に（Dennis and Skilton, 1987, pp. 8-10），自然科学者は既に現在の意味での「科学者」となっていたが，彼らは同時に自然神学の信奉者でもあった．実は，19世紀前半のこの国の科学者は「ほとんど宗教的信念を持って研究を進め，成果を上げ」ており，「科学界の主流が自然界の個々のデザインに神の力を見るペイリー流の自然神学を奉じていた」（松永，1996，7，11頁; Gillispie, 1959, pp. 19-20, 30-31も参照）と見なされているのである．自然神学はヨーロッパ大陸では1800年頃までには実質的に放棄されていたが（Mayr, 1991, p. 55/84頁），「少なくともイギリスでは，17世紀最後の4半世紀から1859年まで」，つまりヴィクトリア時代の半ば頃まで支配的だったとも言われる（*Ibid.*, p. 53/81頁）．ここで，「ペイリー流の自然神学」とはウィリアム・ペイリー（William Paley: 1743-1805）の主著の一つ，『自然神学』（1819c;

1）本論文では，自然神学を，人間の自然の本性である理性に基づく神学という意味を含みつつも，ブリテンの特色である物理神学的側面に力点を置いて理解している．

2）非キリスト教国の日本では考えられないことであるが，現代アメリカでは国民の半数が神による人間の創造を信じている．150年前の19世紀半ばではどのような状況であったかは，ここからもある程度推測できよう．アメリカの状況については，世論調査のデータ等を含めて鵜浦（1992, 1998）を参照されたい．また，北米のWEBには創造論［creationism］のサイトが大量に存在する．

1st. 1802）に示された考え方である．ペイリーは他に，『道徳および政治哲学の原理』（1819a; 1st. 1785）という神学的功利主義の政治哲学，『パウロ研究』（1790）という新約聖書学，『キリスト教の証験』（1819b; 1st. 1794）という啓示神学の主要著作を著しており，19世紀後半までに膨大に版を重ねた（Crimmins, 1998, p. 211）．これらに示される楽観的・静態的・体制的な自然観，社会観は，一体となってヴィクトリア時代前半を支配した一つの知的枠組みを提供しているのである．

また，近年ようやくわが国の経済思想史研究でも，マルサス（Thomas Robert Malthus: 1766-1834）人口論の神学的背景の研究の深化（橋本，1987），プレンのマルサス研究の紹介（プレン，1994），ヒルトン（Hilton，1988）やウォーターマンの著作（Waterman，1991）などを契機に，19世紀前半の「キリスト教経済学」［Christian Political Economy］について総括的な研究が現れ始めたところである[3]．実際，利己心や商業活動，人口と富，救貧政策や貿易などを語る，マルサスをはじめとしたそこに登場するチャーマーズ（Thomas Chalmers: 1780-1847），サムナー（J. B. Sumner: 1780-1862），ホエィトリー（Richard Whately: 1787-1863）などすべてが経済学者であるよりもまずは著名な聖職者であり，多くが神学の，しかもペイリーとの距離の差はあれその影響を受けた自然神学的な著作によって社会的知名度を獲得したと言ってよい．つまり，19世紀前半のブリテン[4]における新しい社会理論としての経済学には，キリスト教神学との半世紀ほどの邂逅と蜜月の時期があり，それがブリテン経済思想史の知性史的特色の一つと見なされるのである．

しかし，極東の非キリスト教国の通念からすると想像以上に宗教的な色彩が濃いこうした19世紀前半ブリテンの知的文化については，個別の研究はさておき，わが国の従来の社会科学，たとえば経済思想史や労働運動史，議会史や政治思想史，法思想史での“近代国家のモデルとしてのイギリス”という標準的理解には欠落しがちな側面であったと思われる．キリスト教的背景のことは，西欧，従って英米の人文・社会科学や科学史の研究の中では自明の前提としてしばしば明示的には語られないのだが，そうした事情にとりわけ疎いわが国の社会科学研究に対して改めてその一端を示すことには，依然として何がしかの意義があると考える．そして，上でメイヤーの示す「1859年」とは言うまでもなく，それまでの枠組みを根底から打ち壊すことになるダーウィン（Charles Darwin: 1809-1882）『種の起源』の出版年である．

本稿では，まず，ペイリーの自然神学の特質と，それがいかにヴィクトリア時代前期の時代や文化に対応するものであったかを示す．そして，そこにあるキリスト教的な発想は，ペイリー以降に，如実に現れ始めた失業や貧困，疾病やスラムといった社会問題を念頭においた，チャーマーズやホエィトリーをはじめとする一連の「キリスト教経済学」に概括される知的営為を生み出していくことも示されよう．その際，19世紀前半のこの議論の枠組みがどこまでキリスト教と経済学の統合に成功しているか，どこまで影響力を持ったかを検討する．また更に，これらの検討を通じて，「ヨーロッパ」という言葉では概括できない，ブリテン知識社会が持

3）深貝（1996, 1997），深貝（2000）や柳沢（2000）を収録している中矢・柳田（2000），大村（2002），柳沢（2003）などを経済思想史の業績としてあげておく．また，石田（2003）もヴァイナーとヒルトンの紹介の中で19世紀ブリテンの社会政策思想の神学的背景について検討している．

4）「イギリス」ないし「英国」はイングランドを意味する「英吉利国」に由来するので，ブリテン島全体を意味する場合には，ウェールズ，スコットランドを加えた「グレートブリテン」の省略形として「ブリテン」を使用する．「イギリス」を使用しないことで，特にイングランドとスコットランドおよびアイルランドとが，本来は独自の歴史と思想傾向を持った異なる国家であることが，表現上の混乱なく読者に伝わることを期待する．

った，フランスやドイツなど大陸の他の西欧社会とは異なる独自の性格について一定の示唆をしたい．こうして，知性史の一つの側面から見たこの時代の知的状況の特質を確認すること通じて，我が国の通説的なイギリス像の再検討に貢献することを目指したい．

Ⅱ　ウィリアム・ペイリーの自然神学とその影響

伝記等によれば（*DNB*, 1996; Meadley, 1810; A. Chalmers, 1819; Clarke, 1974; LeMahieu, 1976; Crimmins, 1998, pp. 207-211），ペイリーは，ノーザンプトンシャー・ヘルプストンの国教会の教区牧師だった父ウィリアムが，ヨークシャー・ピーターバラの聖堂参事会員に転じた後の1743年7月に，前年に結婚した母エリザベスとの間に長男として生まれた．父ウィリアムは1745年に同じくヨークシャー・ギグルズウィック校の教頭となり，ペイリーはそこで初等教育を受け，後年ケンブリッヂへの奨学金も同校から給与されることになる．1758年11月にケンブリッヂのクライスト・カレッヂの奨学生となり，1年後の59年10月から寄宿舎に入って学生生活を始めた．この時期に父ウィリアムは次のような予言を残したといわれている．「わが息子は今や大学へ行った．息子は偉大な人間になるであろう，それもたいそう偉大な人間に．わしはそれを確信しているのだ．というのも，わしがこれまで出会ったすべての者の中で，息子ほど並外れて明晰な頭脳［the *clearest head*］を持ったものはいなかったからだ」（A. Chalmers, 1819, Vol.1, p. iii; 強調は原文）．1819年版ペイリー著作集の編者チャーマーズによれば，後年のペイリーの著作が持っている，「明瞭さと分かり易さ」［CLEARNESS and PERSPICUITY］という特色をこれほど言い当てていたものはないとのことである．

1763年，ペイリーは数学試験第1級合格者の栄誉とともに，ケンブリッヂから学士号を授与された．習得科目は，数学，自然哲学，論理学，形而上学，道徳哲学という標準的なもので，道徳哲学では主としてロック，クラーク，ハチスンが素材であったという（Meadley, 1810, p. 11）．しかし，彼の学生としての学習を特徴付けるものは，分野にとらわれない広範な知的好奇心から来る無計画な「漫然とした読書」［desultory reading］であったようである（A. Chalmers, 1819, Vol.1, p. iv）．グリニッチで，ギリシャ語とラテン語の助教師として職を得，古典研究に違和感を覚えながらも1766年までをそれらを教えた．同年，母校のカレッヂのフェローに選ばれケンブリッヂに戻り，形而上学，道徳，ギリシャ語聖書の講義を担当．ロック，クラークの『属性』，バトラーの『類比』等を題材にした盛況な講義をする中，1767年には牧師に叙階，1776年にケンブリッヂを去って以降，いかにも功利主義者らしくより給与の高い僧職の階段を順調に昇り，1805年5月25日リンカーンにて没した[5]．

さて，ペイリーの思想の最も基底にある彼の神学についてその特質を見てみよう．その際，既に邦語文献では進化論と自然神学との関係を探求した科学史の横山（1979）第2章と松永（1996）第1章，社会科学分野ではマルサス研究の一環でペイリー神学を扱った先駆者・橋本（1987, 1988）を挙げておこう．ここでは，すでに橋本によって巨細に紹介されている点との重複をできるだけ避けつつも，「政治的にも社会的にもキリスト教が大きな力を持ち，キリスト教が思想の根底をなしていた19世紀前半にイギリス」（松永，1996，54-55頁）で，その中軸を担った自然神学の持つ，ある種の全体論的性格と一貫する楽観主義を示しておきたい．

まず，以下が1819年版第4巻に依拠した全27章の目次である．

Ⅰ 論証［デザイン論］の大要（pp. 1-6）/ Ⅱ 論証の大要――続き（pp. 6-14）/ Ⅲ 論証の応用（pp. 14-38）/ Ⅳ 動植物の再生産（pp. 39-43）/ Ⅴ

5）兼職も多い中，通常はカーライル教区の大執事［arch deacon］（1782-没年）として紹介されることが多い．

論証の応用――続き（pp. 43-59）/ Ⅵ 論証の追加/ Ⅶ 動植物の機械的・非機械的部分と機能（pp. 61-72）/ Ⅷ 人体の機械的配置：骨格（pp. 72-96）/ Ⅸ ：筋肉（pp. 96-115）/ X 動物の循環器（pp. 116-145）/ XI全体としての動物の身体（pp. 145-165）/ XII比較解剖学（pp. 166-189）/ XIII特殊な生物体（pp. 189-198）/ XIV予見する装置（pp. 198-205）/ XV協力関係（pp. 205-216）/ XVI補償（pp.216-218）/ XVII 生物と無生物との関係（pp. 228-234）/ XVIII本能（pp. 235-250）/ XIX昆虫（pp. 250-271）/ XX植物（pp.271-288）/ XXI 元素（pp. 289-296）/ XXII 天文学（pp.297-319）/ XXIII 神の人格（pp. 320-346）/ XXIV 神の本質的属性（pp. 346-351）/ XXV 神の統一性（pp. 351-355）/ XXVI 神の善性（pp. 355-418）/ XXVII 結論（pp. 418-428）

見られるように，目次だけからも，従来からのニュートン力学による天体論に加えて，18世紀以降の生物学を中心とした新しい自然科学的な知見の広がりを受け入れた上で，それら全体を総動員してキリスト教信仰の正当性を弁護しようという試みであることが直ちにわかる．人間，動物，自然，宇宙，神までを全体として一気に説明しきろうという姿勢に注目されたい．

ここで，Ⅰ章冒頭に示される，英語圏の教養ある人間なら誰でも知っていて，ドーキンスの著作タイトル*The Blind Watchmaker*（Dawkins, 1986）を見るまでもなく，現在でも引用，参照が繰り返されている有名な「時計の比喩」を紹介しておこう．ヒースの野原を横切っているときに石に足をぶつけたとして，何でそこにその石があるのかと問われれば，石は時の始まりからそこにあったと答えることになろう．ペイリーはこう始めたあと，次に時計の場合に転じる．

> 「しかし，地面に懐中時計があるのを見つけて，どうしてこんな所に懐中時計があるのかと当然の疑問がわき上がってきても，前の答えと同じに，もしかしたらずっとそこにあったのかもしれないなどとはとても言えないはずです．ではなぜ，石の場合と同じようにはその答が懐中時計には使えないのでしょうか．……それは，他の何ものでもない次のような理由からです．つまり，ひとたびつぶさにその懐中時計を調べてみると，石には見ることの出来ない，様々な部品が目的を持って作られ組み合わされているということがわかるからなのです．……［ここで時を刻むという目的のためにいかに膨大な部品が精妙に組み合わされ，懐中時計が動き続けるのかという詳しい仕組みが語られる：有江］．この仕組みが観察されれば…必ず次のような推論に至ると私たちは考えます．すなわち，この懐中時計には，その構造を理解しその用途を設計［design］した制作者［maker］がおられたに違いないということに．」（Paley, 1819c, pp. 1-2）

ペイリーはこの後，「最初の章でなされた時計に対するあらゆる観察が，厳密な適宜性を持って眼球，動物，植物，そしてまさしく自然の作品の中の組織されたあらゆる部分に繰り返されることになります」（*Ibid.*, pp. 43-44）と述べて，第XXII章の天体論まで，人間や動植物の精妙で複雑な器官の博物学的な事例を膨大に紹介する．そして，こうした事例ごとに繰り返し，それらの器官がある特定の目的に適うよう必要な機能を持つように企図されて作られたものとしか考えられないと，上の時計の場合と同じ論理で設計した制作者の存在を推論する．これが典型的なデザイン論である．その場合，器官の目的を導く主要な推論の形式は，望遠鏡と眼球の比較に見られるように類比［analogy］である[6]．

『自然神学』では，VI章までででデザイン論による制作者の推論とあり得べき反論への反駁，VII章からXXII章までで自然界全体の事例によるデザイン論の検証，XXIII章から結論までで制作者が知性と人格を持った善意の神であることを主張している．XXIII章神の人格論の

末尾にある周知の「設計には設計者が必要であるにちがいなく，設計者は人格でなければならず，それは神なのです」（*Ibid.*, p. 351）がその象徴的な言明である．ここでは，しかし，ペイリーのこうした論理の推移の細かい神学的検討ではなく，この主張が含意する彼の社会把握の特色を摘出してみたい．つまり，ペイリーの現実世界に対する視点，評価の問題である．

彼はデザイン論の大要の部分で，人智や人間の技芸を越えた制作者の考案［contrivance］が，自然の中に精妙な作品として具現化し配置されていると繰り返し主張している（*Ibid.*, Ch. I-Ⅲ）．つまり，現実の世界に対するペイリーの基本的な評価は，本来は人間にとって好ましいものとして合目的的に設計され，それが実現されているはずだという楽観的なものである．たとえばXVI章の補償論では，人間の体を完成された基準とした上で，家畜の歯が不完全な場合にそれの埋め合わせとして反芻［rumination］を指摘する．こういう形で自然界では何らかの埋め合わせが合目的的になされ，結果としてすべてが不都合なく調和的に機能していると見なすことになる（*Ibid.*, p. 225）．これが人間社会に適用されると，実際の社会に存在する不幸や困難や災害を，完全であり善性を本質とする神の設計になぜ欠陥や悪があるかに見えるのか，という問題へと設定し直し，それらも実は人間にとっての試練［trial］という形で存在する神の設計の一部であり，試練を通じて人間に向上心と将来の完全な社会への願望をもたらすことになると結論付ける（*Ibid.*, XXVI章）．

> 「健康と病気，快楽と苦痛，富と貧困，知識と無知，権力と抑圧，自由と束縛，文明と野蛮，これらは皆それぞれの機能と役割を負っており，すべてが人格の陶冶に寄与するのです．最上の品格は最も深い絶望のときに，最悪の運命の中にこそ生まれ得るのです．キリスト教自体が，つまりその啓示は，至福であると同時に試練に他ならないのです」（*Ibid.*, p.414）．

本稿の関心からすると，貧困，抑圧，束縛などがそれ自体として直ちには解消の対象とは見なされず，むしろそれらの存在に固有の役割と意味を持たせていることに注目すべきである．いわば，どのような社会問題に言及しようとも，自然神学に発想の基礎をおく限り，現存する社会の枠組み自体に問題の根元を見るという視点は最終的には希薄にならざるを得ないのである．

また，V章の論証へのあり得べき反論部分で，ペイリーはエラズマス・ダーウィン（Erasmus Darwin: 1731-1802）の進化論を念頭に置き，リンネ（Carl von Linne: 1707-1778）以来の種の不変説に立って，これまでの歴史で生物の種が変化したり死滅したりしたことはないという主張を，次のようなロジックで示そうとする．

至高の制作者の意図なしに無限の時間における偶然の作用によって現在の状況があるという仮説があるが，もしそうであるなら，これまで何百万もの種が不都合によって死に絶え，今は生き残りだけがいることになる．つまり，「今はいないが，数え切れない種類の動物が存在したかもしれない．この仮説からすると，ユニコーンや人魚，妖精やケンタウルス，あるいは画家の空想や詩人のおとぎ話を，現実の事例として我々は見なければいけなくなる．……もし一旦種が存在したのなら，それが今となっては失われてしまったなどということは，決して筋道

6）モスナーは，バトラー（Joseph Butler: 1692-1752）の『類比』の主張を「人間と自然についての諸々の事実をあるがままに検討し，それを通じて人間の経験を超えた事物の蓋然性を示す試み」（Mossner, 1936, p.81）とまとめているが，ペイリーのデザイン論の核心も類比ではある．ただし，ペイリーの議論が観察手続きとしての類比に特化され明快で単純になった反面，蓋然性の中に理性を越えた存在を見いだすバトラー独特の方法は跡形もない．生体の一部である眼と単純な構造の単なる物としての望遠鏡とのアナロジーの通俗性について，デザイン論の専門家ハールバットⅢ世は「この種の類比はおよそデザイン論で考えられる最悪の形式である」と酷評している（Hurlbutt Ⅲ, 1985, p. 173）．

のとおる形でそのわけを示せるものではない」(pp. 50-51) と．要するに，今見ることの出来る動植物の様々な分類も，そのようなものとして設計者によって設計されたと見なすのである．つまり，ペイリーは眼前の自然の世界を本来的には固定的，静態的なものと捉えているのである．変化を避けるこうした現状維持的で保守的な視点は，たとえばフランス革命の混乱の過程を観察する中で執筆された『満足の理由』(1792) に示されている，富者から貧者への強制的な所得移転などのラディカルな社会変化を伴う人為的な介入政策への，否定的な姿勢につながる[7]．

XXII章の天文学では，マクローリン (Colin, Maclaurin: 1698-1746) の『アイザック・ニュートン卿による哲学的発見の解説』(1748) から，「このような事物の精妙な構造は，まさしく考案 [contrivance] から，そして知性を持ち自由で最も強力な主体からのみ生じ得る」(p. 317note) を引用すると同時に，ここでも「多くの天体は，太陽や恒星のように，静止している」(p. 318: 強調は原著) と，運動ではなくて静止状態を強調し，恒星体系全般の不変性にも注意を喚起している (p. 319)[8]．

ペイリーの著作は，『自然神学』自体が先駆者のレイ (John Ray: 1628-1705) の『神の叡智』(1691)，デラム (William Derham: 1657-1735) の『物理神学』(1713)，バトラー (Joseph Butler: 1692-1752) の『宗教の類比』(1736) などの先行する業績に多くを依拠しており[9]，決して独創的なものではない[10]．しかし，簡潔明瞭な文体やわかりやすい事例紹介，手際よい整理などによりいわば教科書の役割を果たし，他の2著とともに事実，ケンブリッヂ大学では学位に関わる試験科目に，ペイリーの代表的な3つの著作が指定されていた．ケンブリッヂ時代のダーウィンがこれらペイリーの著書に傾倒していたことは，その自伝からよく知られている[11]．また，19世紀前半までのブリテンの宗教文化全般に対する影響としては，「ウィリアム・ペイリー師によって巧妙に操られたキリスト教弁証の科学という武器が，キリスト教への啓蒙からの攻撃を撃退していた」(Gilley, 1994, p.302) と

7）ペイリーの*Reasons for Contentment addressed to the Labouring Part of the British Public* (Carlisle: Wheeler, 1792) Appendix 'Equality' (1792) は，ペインの『人間の権利』への反響に対抗して政府によって国王の名において組織された，Loyalismと概括されるいわば反啓蒙出版キャンペーンの中で出されたパンフレットである．ペイリーの体制的な性格がよく現れている．一連の事情については，このパンフレットも収録されている (Vol. VII, pp. 219-26) 全8巻シリーズのG. Claeys (ed.), *Political Writings of the 1790s*, London: Pickering & Chatto, 1995. の1巻編者序論 (pp. xvii-lvi) を参照されたい．

8）XXI章の短い「元素」は，水，火，空気，光の4元素を挙げるのみのアリストテレスレベルの理解で，本来の意味での科学的知識の点では10歳も年上のプリーストリー (Joseph Priestley: 1733-1804) にまったく及ばない．

9）バトラー，デラム，レイなどの先行者との密接な関係については多くの著作で指摘されているが，引用も多くて比較しやすいDillenberger (1988)を参照されたい．

10）刊行直後の『エディンバラ・レヴュー』1巻 (1802年10月-1803年1月号) の書評でも，「著者の最大のメリットは，厄介で難解な疑問を明瞭に理解していることと，気の利いた事例の選択と明確な整理で議論を展開しているところにある．その一方で，著者の専門領域での新たな知見は乏しく，一見独創性にあふれているかに見える結論全般が，既に他の人々が提供した，詳細で綿密な検討を経た主張によって触発されたものであることが見出されよう」(Revew Article Ⅲ, pp. 287-288) と，冒頭に近いところで厳しい批評をしている．この部分は，現代まで続くペイリー評価の原型であろう．また，XXVI章「神の善性」の項で，完全な善性から無限の恩寵を説き現世では必ずそれが悪意を量的に凌駕することをもって世界の本来的な幸福を導く論理には「大変危うい理由付け」と批判するとともに，無神論の哲学者による形而上学的な神の否定論への対峙が乏しい等の指摘がある (*Ibid.*, pp. 303-304)．もっとも，引用の多い長大な書評の最後では，荘重で雄弁な文体を賞賛しつつ (p. 305)，「この著作は間違いなく大変な好感を持って受け入れらるであろう」(*Ibid.*, p. 304) と極めて正確な予測をしている．

まで言う評価もある[12].

しかし，ペイリーの影響がどの階層にどの程度まであり，それがいつまで続いたかについては，厳密にははっきりしない．19世紀前半の「流行」の地質学を中心に自然科学を見れば，「自然科学の新しい知見に基づいてペイリー流の自然神学を展開したもの」（松永, 1996, 121頁）と言われる，いわゆる「ブリッヂウォーター論集」が1830年代に8集に渡って刊行され，科学入門書として広く読者を獲得した．これらはさらに，1850年代に別の叢書に組み込まれつつ1880年代まで新版の刊行が継続されたという（同，140頁）．ペイリー自身の著作について言えば，レズリー・スティーヴン（Leslie Stephen: 1832-1904）による辛口の批評がある『18世紀イングランド思想史』が出版された翌1877年に，著作集の新版と各種の版の単著数冊が出版され「継続する影響力を示した」と言われ，『証験論』に至ってはケンブリッヂの教育の中で1920年まで使われたとのことである（Crimmins, 1998, p. 211; Clarke, 1974, pp. 126, 129）．

その一方で，ペイリー伝の著者の一人レマヒューはペイリーの道徳哲学について，18世紀末から批判書があり，1833年のセジウィック（Adam Sedgewick: 1785-1873）『大学教育についての論考』による道徳感覚論からの徹底した功利主義道徳論への批判以降，倫理思想としてのペイリーの影響力は減衰したとある（LeMahiue, 1976, pp. 155-159）．さらに，コールはペイリーに対するソッツィーニ主義ないしユニテリアンと論難する幾つかの雑誌記事やパンフレットとその広がりを検討する中で，彼の三位一体論の解釈に対してその神学的正統性を問う疑問が，既に1800年代の初頭から投げかけられており，1825年までにはそうした評価が定着していたとする（Cole, 1987, pp. 20-25）．

さらにしかし，アヤラは新刊の学術雑誌『神学と科学』創刊号の巻頭論文において，宗教の科学との共存をふまえた上での，理性からの宗教の超越性を主張する立場から，ペイリー『自然神学』に示されたデザイン論を優れた先駆的業績と見なす主張を展開している（Ayala, 2003, pp. 1-32）．現代まで生き残っている例と言えるかもしれない[13]．とはいえ，自然神学の命脈についての科学史家の典型的な評価は，ダーウィンの衝撃に加えて，自然を制御できるという確信が増し，自然に対する怖れがなくなり，地球がそれほど安定してはいないことが認識され，物質主義の進展による人間理性の力への信頼がうまれたことにより，19世紀半ば以降に科学的議論から自然神学が放逐された（Bowler, 1992, pp. 249, 308-309, 328, 360）というものと思

11）ケンブリッヂでの教科書の経緯，ダーウィンの証言，および彼の功利主義批判については松永（1996, 49-50, 172-173頁），同じく教科書の件及び大学内での受容一般については柏木（1995, 125-132頁）を参照のこと．なお，ケンブリッヂにおけるペイリーと広教会派との関係は複雑なのでここでは触れないが，コウルリッヂがロックとペイリーを並べ，その機械論と経験主義に対して「生涯の闘い」を挑んでいたことはよく知られている（McFarland, 1969, p. 41）．

12）ギリスピーは19世紀前半の科学と自然神学との関係についての古典とも言える著作の中で，ペイリーの議論の中核を「到達しつつあると我々が見ている目的に至るための手段として，自然のすべてが設計されている」（Gillispie, 1959, p. 39）とまとめ，この創造者のイニシアチヴによる考案と設計を機軸にした見地がエスタブリッシュメントとしての国教会を越えて一般に受容されたと見なす（*Ibid.*, pp. 104, 115-120, 185, 195-196）．なお，なぜアメリカでは進化論に否定的傾向が強いのかという点について，ファイファーは『種の起源』出版の1859年当時までに，ペイリーの自然神学がアメリカのプロテスタント知識人社会に広範に浸透していたことを指摘している（Pfeifer, 1988, p. 174）．

13）デザイン論に関する最新の議論はNeil A. Manson (ed.)(2003) *God and Design: The Teleological Argument and Science,* London & N. Y. を参照されたい．生物化学，進化生物学，分子生物学，天体物理学，宇宙生物学，数理哲学，確率論，科学哲学，宗教哲学，哲学史などの研究者を総動員して多面的に検討しており，ペイリーも頻繁に言及されている．こうした出版が可能なのも，我が国と英語圏諸国との知的風土の違いによる．

われる．

以上を総合し，著作の販売状況や自然神学による科学普及書「ブリッヂウォーター論集」[14]の驚くべき普及度を考えると，やはりブリテン19世紀中葉までは，デザイン論に基づくやや幅広い「ペイリー流の自然神学」（松永, 1996, p. 11）と概括されるキリスト教弁証論が，知識人の枠を越えて一般にも受容されていたと見なすのが妥当であろう[15]．

では，なぜフランスを始めとした大陸諸国と異なり，ブリテンにおいて幅広くに受け入れられる余地があったのであろうか．この点については，さしあたりブルックの説明を紹介しておこう（Brooke, 1991）．彼によれば，ニュートンの科学と神学，ボイル・レクチャーの影響に見る知的世界に内在する体制内化要因に加えて[16]，まず政治的な背景として，王権を規制しうる法の支配を確立した名誉革命体制という，現実に存在する特定の政治体制を理論的に正当化しようというの広範な機運があったという．それに対応して，自然の秩序の安定を主張する自然神学が，ステュアート朝からハノーヴァー朝への継承の正統性を脅かす議論を鎮めるのに都合よく有効であったとする（*Ibid.*, pp. 198-199）．次に経済的背景として，市場経済の成長によって啓示的な信仰が掘り崩されたというイングランド啓蒙の社会的帰結を指摘する．つまり，18世紀以降，人々が貨幣を中心とした経済生活を送るようになり，個人主義が勃興し，宗教的信条にとらわれず現実生活の向上を目指す中で幸福を追求するという状況では，それを先導する，安定した社会的枠組みの上での「洗練された新しい道徳秩序」が求められたというわけである（*Ibid.*, p. 199）．

以上を確認の上，次に19世紀中盤までのペイリー以降の聖職者の議論に簡単に立ち戻りつつ，その神学的立場と，経済学という形に現れた社会把握の特質との関連を見てみよう．

Ⅲ　自然神学者たちの経済社会像
── 調和から変動・逸脱へ ──

ペイリー以降も19世紀初頭から1850年頃までの間に，自然神学に基づいて宇宙論から地質学，心理学や骨相学から経済学の領域までおよそ森羅万象について「説明」を試みる多くの著作が聖職者によって刊行され，しかも版を重ねるほどに受容された．発表当時大いに歓迎され，しかも現在まで残る議論の一つが，『旧約聖書・創世記』の天地創造の記述と地球の地質学的年代との調停を図る，創造論における「ギャップ理論」[the Gap theory]である．チャーマーズは『キリスト教の啓示の験証と権威』（1815）においてこれを展開し，彼の名声はギャップ理論の普及に大きく貢献したと言われる（McIver, 1988, p.6）．また，同様の議論を展開したサムナーの主著『天地創造の記録』（1816）は，1850年までに6版を重ねたが，現代の科学史家によればこれらは「『聖書』と地質学の“調停”」の典型と見なされている（McIver, 1988, p.7）[17]．

しかし問題は，「近代を通して…ヨーロッパ

14）1830年代に，キリスト教が天文学や地質学，生物学などの自然科学上の新しい発見をも取り込んで新しい時代にも維持されることを目指し，主にペイリー的な自然神学によってそれらを解説した「穏健な中産階級」を対象に企画されたシリーズ．1850年までに全8集で6万部を販売したという（松永, 1996, 137頁）．

15）この点に関連して，ブルックは聖職者による議論の参加の歴史を踏まえ「科学の『専門家』の新しい世代によって聖職者のアマチュアが追いやられる19世紀中葉まで，デザイン論を組み上げてみるという彼らの作風が大きな打撃を受けなかったのは偶然ではない」と述べている（Brooke, 1996, p. 13）．マグラースはペイリーの『自然神学』自体が「19世紀前半までイングランドの大衆的な宗教観に影響を与えた」と見なしている（McGrath, 1999, p.99）．

16）ニュートン力学や哲学としての機械論の体制内化については，18世紀広教主義の体制擁護的側面を強調したジェイコブ（Jacob, 1976）を参照のこと．広教主義と19世紀広教会派の穏健な政治姿勢を繋ぐイデオロギーが自然神学である．ニュートンの自然神学の視点からその盛衰を扱ったガスコーイン（Gascoigne, 1988）も参考になる．

思想において大きな影響力をもっていた」自然神学が「17世紀から18世紀においては，静的固定的な自然観・生命観を支えていた」としたとき（横山, 1997, 32頁），最も早く農業社会から商業社会・産業社会への大きな転換期を迎え社会問題が表出し始めた19世紀始めのブリテン社会の状況に対して，上のような議論を展開する聖職者たちがそれをどのように本来の調和的な自然観と整合的に解釈し，意味づけようとしたのかということにある[18]．

すでにこの点については，19世紀前半のブリテン商業社会の展開と経済学なる新興科学を体制的イデオロギーの支柱であったキリスト教側がどのように対処するのかという，知性史的な問題として，ウォーターマン（Waterman, 1991）や深貝（1996, 1997, 2000）などによって捉えられてきた．彼らによれば，個別課題としては①利己心と私的所有，②自由競争市場，③結婚と賃労働制度，④社会経済的な不平等の存在などの問題があり（Waterman, 1991, p. 3），対応枠組みとしては，①利己心，私的所有，商業を肯定する，②商業社会をキリスト教的な文明史の中へと位置づける，③マルサスの人口原理と経済活動と救貧問題を神学的に整理して受け止める[19]，④経済学に示される新しい科学的知見を地質学の場合のようにキリスト教側で包摂するなどの類型があるという（深貝, 2000, 109頁）．ここでは大要この提起に沿いつつ，前節で見てきたペイリーの自然神学との対比という限定された視点から，キリスト教経済学者とおぼしき若干の人物の言説を検討する．

まず，スコットランド長老派の牧師から出発し福音派に回心したチャーマーズは，セント・アンドルーズ，エディンバラ両大学で教え，神学とともに数多くの経済学の著作を著していることからもその代表と言えよう[20]．そこで，まず彼の神学的な見地を確認しておこう．「ブリッヂウォーター論集」第1集に見る彼による人間と自然との関係は，そのタイトルにあるように，あらゆる自然の驚異的で精妙複雑な仕組みが，ことごとく叡智と慈愛に満ちた摂理によって人間の必要と利便に「適応」させられており，逆に道徳的資質まで含めたすべての人間の属性が，創造者によって既に自然の中に用意されている便益を享受できるよう「適応」させられている，という循環論法的な都合のいいものである（Chalmers, 1835, I, pp. 50-56）．自然についてはペイリー以上の楽天性，予定調和が感じら

17）松永は，聖書地質学におけるギャップ理論を「隔たり理論」と訳し，チャーマーズ，サムナー，バックランド（William Buckland: 1784-1856）らによる普及の過程を簡単に紹介している（1996, 78-80頁）．現代アメリカのWEBサイトではthe Interval Theoryもあるが，賛成，反対を問わずほとんどthe Gap theoryを使用しているので，わかりやすさも考え小論では和訳せず「ギャップ」とした．http://www.gap-theory.com/を一例として挙げておく．

18）神学者の著述の構成と内容からして，信仰や神学上の見地と現実社会の分析・評価の間には，整合しているかどうかはさておき内的な連関があると判断できる．この点で，18世紀後半からのイングランドにおける教会と社会との関係を総括的に検討したノーマンが，19世紀前半の知識文化，政治風土自体が聖職者に救貧その他の社会的問題への関心を促したのであって，彼らの神学の内容とは関連がないとするのには同意できない（Norman, 1976, p. 10）．この評価は石田の指摘に触発された（2003, 118頁）．

19）人口原理がこの時期に神学者によって重要視されたのは，神の定めた基本的・普遍的な自然法則を記述した「万有引力の法則」に対応する，人間社会における普遍原理と見なしうると彼らが考えたからである．

20）ジャーナリスト，著述家のジョン・レイラー（John Lalor: 1816-1856）は，チャーマーズについて「経済学に，キリスト教がいわば洗礼を授ける嚆矢なった人物で，そのことはキリスト教が復興するために一番必要なことであった」と述べた（Lalor, 1852, p. xvii）．また，「チャーマーズの『大都市におけるキリスト教的，市民的経済』（1821-1826）は，それまで出版されたキリスト教側からの産業化の諸問題に対する応答のどれよりも広く読まれた」という評価もある（Noll, 1997, p. 765）．19世紀プロテスタントの経済観についてはNoll（2001）を参照されたい．

れる[21]．

しかし，同時にスコットランド人チャーマーズには個人主義的色彩の濃いイングランド人ペイリーとは異なる，社会組織の中での人間の相互行為とそれに関わる心理学的な視点があり，それが彼の経済学分析への起点となっていると思われる．すなわち，「家庭内における相互扶助と，より広い関係，つまり大勢の人間を結びつけて経済的，政治的な制度のへと組み込むような関係の中での相互扶助の双方で，我々は，否定しようのない神の叡智と配慮を見いだすことになるだろう」（*Ibid.*, p. 24）と言う．この，現代の共同体主義［communitarianism］を彷彿とさせるような言明に続けて[22]，「それは人間本性の法則である．この法則によって社会経済は繁栄に向かって前進し，逆にこれなくしてはすべてが混乱に陥ってしまう．また，人とその同胞たちとの親近性によって個々人が一般的利益［general interest］へと調和する．そして明らかに，この親近性は，諸々の家族と諸国民の福祉［well-being］に向かうべき準備として設計されているのである」（*Ibid.*）と言う．

個人の行為について言えば，神の善性から人間の徳性を導き，徳性はそれがもたらす固有の快［pleasure］と，神慮によって与えられている良心の産物としての公正の感覚［the sense of rectitude］とで報われる．仮にどのような不正行為があっても，それは罪に向かうか神慮によって道義に向かうかの試練となり，結果として全体では常に善が悪を上回る（*Ibid.*, pp. 116-117）とする．

チャーマーズの場合，あくまでも神学的議論から見る限り，古典派経済学が前提したような私有財産と競争的市場に対する評価がはっきりしない．逆に，経済と言ってもスミス的な大きな社会ではない小規模な共同体的な経済を理想的なあり方に想定していることが推測される．これらの点と，性善説的な人間把握や調和的な帰結を前提しているかのような枠組みで，どこまで商業社会へのキリスト教側からの妥当な対応と包摂になり得るのかが問題となろう．経済著作にあるチャーマーズの経済論の内容は深貝（1996, 1997）に譲るとして，ここでは彼による経済学のキリスト教への‘取り込み’がどのような性格であったのかだけを見ておくことにしたい．『商業および日常生活へのキリスト教の適用についての論説』（1820）の序文では，交易に携わっている教養ある信徒ならば，神から与えられている霊的な規律によって，富への貪欲は本来ならば自然と効果的に規制されるはずだと，まず言う．しかし，そこに何らかの逸脱がある場合，たとえば行き過ぎた企業心による過度の投機の後には，失業，倒産，恐慌などが観察されることになるとする（Chalmers, 1836b, pp.1-2）．ペイリーの項で見たように，神学的には世俗の経済行為も人間に与えられた試練の一つであって，経済現象といえども神からの徴（しるし），すなわち警告や制裁と見なされる．したがって，ヒルトンが解釈し，深貝が指摘するように，警告や制裁を覆い隠してしまう政府による恐慌対策や保護貿易政策などの介入政策は原則的には回避されるべきものとなる（Hilton, 1985, pp. 141-143, 151; 深貝, 1996, 6頁）．経済的破綻も神慮のうち，ということになるが，自然そのもに対するのとは異なり，具体的な社

21）調和性に関連して，松永（1996, 146頁）が指摘するように，チャーマーズの『自然神学』（1836）の地質学の項目では，当時の知見を踏まえて地球の長期の地質年代を承認した上で，その過程での生物の絶滅と創造がその都度「設計者の手，すなわち神の決定」によって行われているとする．したがって，生物の種の転成は否定されていることも含めて（Chalmers, 1836a, I, pp. 249, 245），新興科学との調停が企図されているとはいえ，現状に関しては自然神学特有の固定的な自然観が示されていると考える．ただし福音派チャーマーズは，自然神学そのものは信仰にとっては副次的な役割しか果たさないと見ていた．この点，Rice（1971）の神学的検討を参照のこと．

22）注20で挙げた『大都市における…』の出版広告（1999）の中で，編者のデイヴィド・グラッドストーンはチャーマーズを「社会福音主義的共同体主義」と特徴づけている（http://www.thoemmes.com/economics/chalmers3.htm）．

会問題を扱う際には，ペイリーの自然神学が本来持っていた楽観性が消失していることに着目したい．

しかしより重要なことは，福音主義者チャーマーズ本人の積極的な意図と行動にかかわらず[23]，キリスト教神学，とりわけ自然神学的な理念と，経済分析との間に方法的な乖離が生じているということである．第一に，社会的困難への制度的・政策的対応は，「自然」への人間の介入になるばかりか善が悪を上回るべき神の「作品」の不完全さを承認することになってしまう．その間隙を埋めるものが，彼の救貧活動に見られる（注23参照），公的・制度的扶助ではない徹底した自発的な慈善活動に他ならない．第二に，チャーマーズは幾つかの経済著作で，農業者・商品生産者・消費者の「人口3区分論」と食料増産による人口増加を基礎とした一種のマクロ経済学を展開し，論理の帰結の一つとして，元の比率での3区分を壊すような人口移動の可能性を指摘している（深貝, 1996, 5-6頁）．つまり，経済過程に対する自らの分析によって，神学から来る調和的社会像が維持できなくなる可能性を示してしまうという，皮肉な結果を生んでいるのである．原因は，前提となる自然神学とともに，チャーマーズの描いている実体的な社会像が，先に示したようにお互いが顔見知りで，おそらく聖職者による道徳的教化が可能な程度の小規模な農本経済であることにもよろう[24]．

次に，現代の創造論の言う「ギャップ理論」で反響を巻き起こしたサムナーについて簡単に触れておきたい．1850年までに6版を重ねた主著『天地創造の記録』（1816）では，まず「自然神学を本当に利用するということは，啓示があきらかにしている真正なものの強い蓋然性［probability］をしめすこと」（Sumner, 1816, I, p. xi）と言い，バトラーの『類比』の蓋然性に基づく自然神学に立つことから始め（注6参照），ペイリーが動植物に設計を見たのに対し，地質学の新しい知見を中心に神の設計の証拠と思われる事物を紹介している．人間社会についての議論では，ペイリー同様に，自然神学に典型的な神の叡智と善性によってこの世界が組織されたという主張を前提に，現実の社会への肯定の姿勢が顕著に示されている．柳沢（2000, 89-94頁）のまとめに依拠して言えば，サムナーは，①人間の利己的な活動と私有財産の承認，②職業と階層分化による徳性の活性化（不平等の是認），③貧富の不平等な状態という試練を通じた徳性の向上，④人口増加圧力による生産力の上昇と，⑤移民によるキリスト教文明の伝播，という主張をしている．「ペイリー派の流れをくむデザイン論」者（同, 86頁）と見なされる所以であるが，既に見たように，デザイン論に立つ限り，いわば神の作品である自然も人間社会も，原則的には調和的で安定的なものとして性格付けする以外にない．したがって，マルサスの人口原理があたかも機械的・自然的に社会に害悪をもたらすかに見え，その結果，調和的

23）救貧を経済的な社会問題として自覚したうえでのグラスゴーでの教区活動は，いわば熱狂的なもので，説教だけでなく基金の設立など教区内の救貧活動にも大きな成果を上げた．救貧に対しては，公的な扶助ではなく，あくまでも「自発的貢献」として扶助活動を行ったが，それは，「貧民に法的な教区扶助権を与えることは，確実に彼らの自立心を失わせ，老齢の両親を援助すべき子供の余力と意欲を損なう」という古いスコットランド貧民対策の伝統に則ったチャーマーズの「信念」からという（*DNB*, 1996, entry: Chalmers, Thomas）．本稿の立場からすれば，神学的理由も加味されるべきである．また，カルヴァン派の教義からは，富は精励に対する神の恩寵であるのに対し，貧困は怠惰の結果であるという見解が導かれることを付け加えておく．

24）チャーマーズの「人口3区分」経済論の詳細な検討は深貝（1997）にある．また，同論文の「［補論］チャーマーズの経済学との関わり，およびチャーマーズ像の変化」（27-35頁）は，日本だけでなく英米の研究史の圧縮されたサーヴェイとして優れている．そこに紹介されている近年のチャーマーズ評価をめぐる議論の混迷の原因の一つは，彼の神学そのものと同時に，その経済論との関係についての考察の不足が原因と思われる．

であるべき自然神学的社会像を解体しかねないと危惧した人々にとっては，人口増加による移民までも福音の伝播であるとみなすなど，全体に「人口増加とともに神のデザインが実現していく」（同, 100頁）と読みとれるサムナーの議論は安心して受け止められるものであったと言える．いかにも，イートンからケンブリッヂというエリートコースを経て聖職に就き，1848年からイギリス国教会の最高の地位であるカンタベリー大主教に上りつめたエスタブリッシュメントらしい意見ではある[25]．

人口と救貧以外にチャーマーズほどの現状や経済の動きへの関心がない分，チャーマーズが抱えていた自然神学的理念と分析の枠組みや結果との乖離の問題は，サムナーには存在しないと言ってよい．とはいえ，版を重ねて結果的に「ギャップ」理論とマルサスの人口論の普及に寄与したということは，ヴィクトリア時代前期の科学という時代精神と，現状維持という体制派の心性の一端をサムナーも担っていたと言えるだろう．

ダブリン大主教に就任する前に，オクスフォード大学の経済学教授でもあったホエィトリーの場合には，サムナーとは事情がかなり違うと言わねばならない．カタラクティクス［CATALLACTICS］（交換の科学）という学問名の提案を行い（Whately, 1932, p. 6），また，効用理論の先駆者にも擬せられる彼は，体系的な経済学書を残さなかったとはいえ，方法論を自覚したすでに言葉の本来の意味で経済学者といってよい．彼の宗教論の一つである『道徳とキリスト教の証験』（1857）では，他の神学者ならデザイン論の素材として使う種の存在などの博物学的事例が，逆に『聖書』の記述に反する事例として紹介されている．すなわち，「もし，大地やそこに存在したとするすべての動植物が6日間に…創造されたという『聖書』の記述を受入れると，……地質学者たちによって証明されたかに見える，地球や多くの種類の動物は人間が現れるはるか昔に存在したという発見は，『聖書』を信じることとまったく一致しなくなってしまう」（Whatley, 1857, p. 285）と．これに対するホエィトリーの扱いは，「いまや『聖書』の啓示の目的は人々に…物理科学を伝えるのではなく‘宗教’を伝えることであり，…‘誰が’世界を作ったのかということなのだ」（*Ibid.*, p. 286）と言い，要するに，信仰を内心の問題に還元しそれと科学とを峻別する姿勢を示している．

さらに，「私の第一の目的はこの研究［経済学］に対する蔓延っている偏見，特に宗教とは和解できないという偏見と闘うことである」と「序文」にある『経済学の入門講義』（Whately, 1832）になると，宗教・道徳と経済学との関連を扱う第Ⅱ講の中で繰り返し，『聖書』は宗教的，道徳的真理を示してはいるが，当面の課題について正邪を判断するため完璧な指図を与えるようには意図［designed］されていないことを強調する（*Ibid.*, pp.32-35）．「『聖書』は確実なガイドに過ぎない」（*Ibid.*, p. 35）のである．その上で，「正義は『聖書』や生得的な良心に埋め込まれている．しかし，［社会の］公共的な事柄ではしばしば次のことが起きている．すなわち，公共の<u>便宜</u>［expediency: 強調は原文］こそ，どの特定の方向が正しいかを決めているのである」（*Ibid.*, p. 36）と言う．このように，宗教と経済学が扱う領域を区分した上で，公共の便宜，すなわち社会的な効用による正しい判断を導くための科学として経済学を位置づけている．各領域の役割分担を示しつつ，宗教的モラルが最終的には支えているにしても，経済学の主要な課題が現実には便宜・効用であることを巧妙に導いている[26]．もちろん，富を主題にすることも当然視されている（第Ⅱ，Ⅶ講）．

実は高位にある聖職者が上のように経済学［political economy］に親近感を示すことは，1830年代のブリテンでは極めて特異なことなのである．新興科学としての経済学は金銭につ

25）柳沢は，サムナーは「楽観的な商業社会肯定論を意図的に展開した」（2000, p. 101）とまとめている．

いて考えるいぶかしげな営為と思われ，経済学者［political economist］と見なされることは中流以上の尊敬すべき市民から不評を買う状況にあった．ホエィトリー同様，効用理論の先駆者の一人と目されているベイリー（Samuel Bailey: 1791-1870）は，「“経済学”はどの行為が利益を生むのかということの研究の別名にすぎない」（Bailey, 1931, p. 6: 強調は原文）と宣言していたが，1832年選挙のシェフィールド選挙区ではいかがわしい人物と見なされ，得票率16％で立候補者4人の中の最下位で敗れ去っている[27]．この状況であったが故に，ホエィトリーは特に「経済学への偏見」という上に紹介した発言をする必要があったのである．彼の経済学への並々ならぬ意欲が感じられないであろうか[28]．

では，この新しい科学と自然神学との関係はどのように考えられていたのであろうか．社会と人間の関係を扱った第Ⅳ講では，まず，「感覚に直接うったえる現象が，おそらく若い精神には自然神学研究の最良の‘入り口’である．しかし，哲学的な探求者が複雑な社会構造の中に示されている，人間の幸福のための様々な仕掛けの中に神の‘叡智’の徴（しるし）を求め始めると，より大きな感嘆の念が湧き上がるであろう」と言う（*Ibid.*, p. 101; 強調は原文）．続けて，こうしたいわば社会科学的知識が天文学や生理学のような自然科学的知識と同様に理解されるようになれば，叡智が一層際立つとし（*Ibid.*），明らかに，ペイリー流の事物の観察に基づく類比によるデザイン論ではなく，現実の社会構造に対する学的認識そのものが啓示に至る道に位置づけられている．

また，ホエィトリーは繰り返し，各人がそれぞれの利益に基づいて行動しても，摂理の導きによってそれらが生存，幸福，進歩といった全体の利益に繋がるという主旨のことを述べ，その検討が自然神学の一分野であると述べている．しかし同時に，「この宇宙のあらゆるところに我々は叡智と慈愛の設計［design］を見る．にもかかわらず，その設計にとって明らかに障害物となっている多くの事例を見ている」と指摘し，それらは設計で示されているはずの向上の方向への傷害，遅延，逆転であり，人間社会にとっては，天変地異や悪政や疾病であることを言う．そして，これらは「自然神学のあらゆる領域にとっての困難」であると明言する（*Ibid.*, pp. 103-104, 106-107）．「困難」を明示的に認めるホエィトリーのこうした主張は，経済学者としてはアマチュアであるサムナーの，デザイン論というより楽天的な摂理論とは決定的に異なっている[29]．自然神学として見ても，ペイリー流の楽観的・調和的なデザイン論は見いだせない．人口にとどまらない社会の経済的な動き全体に内在するはずの，自然科学の法則に対応する経済法則が神のデザインと言えるかもしれないが，それを「交換の科学」によって見

26）こうした立場からは当然，一見意外に思われる彼のマンデヴィルへの肯定的評価や（Whately, 1832, pp. 44-49），古典派の労働価値論への否定的評価が導かれよう（*Ibid.*, pp. 252-253）．

27）ウォルトンによれば，「哲学者，文筆家のベイリー…は，経済学者としての見解に好奇心を持たれていたが，それゆえ選挙民一般からは不人気であった」（Walton, 1948, p. 170）とあり，得票数を「Parker 1515/ Buckingham 1488/ Ward 1210/ Bailey 812」と紹介している（*Ibid.*, p. 171）．なおベイリーは，マルクスの価値形態論への影響で我が国では著名である．

28）フォウリーは，ポテト飢饉の頂点に近づく1847年，自ら創設に関わったダブリン統計学会のある会議で，経済原則をかざして援助に消極的な姿勢を容認する経済学への批判の高まりに対して，経済学だけが「激震に揺れるこの国を救済できるこれまで存在した唯一の手段」というホエィトリーの発言を紹介している（Foley, 1995, p.7）．また，「経済学ホエィトリー講座」をダブリン大学トリニティ・カレッヂに開設したことを考えれば，彼の志向は明らかではないだろうか．

29）経済思想から見た「摂理」［providence］については，ここでは展開できないので基本的に見方を踏襲しているジェイコブ・ヴァイナー『キリスト教と経済思想』有斐閣，1980年（原著1972年）とともに，石田（2003）Ⅱ章を参照されたい．

いだそうとするホエィトリーの姿勢は，社会の経済過程のメカニズムそのものを探求するというヴィクトリア時代の「科学」精神に他ならず，経済学をキリスト教神学の中に取り込むという当初の，記述されている意図を既にはるかに越えているのではないだろうか[30]．むしろ，自然神学への言及はホエィトリー自身の経済学への傾倒に対する弁護論とすら見なしうる．ウォーターマン＝深貝の言う，知識の領域の区分，すなわち「知の棲み分け」（深貝，1996，2頁；Waterman, 1991, p. 10）の試み自体が，この時代の神学の影響力を象徴する一方で，内容的には神学と経済学の接合ではなく，乖離ないし断絶の兆候を示していると見るべきであろう．

ホエィトリーは，依然として宗教的な時代状況が反映している中で『講義』のような問題設定をし，自らもペイリー以降の自然神学者の一員ではある．しかし，上に見たように，神学の領域と，その対極にいる世俗の代表としての無神論者ベンサム（Jeremy Bentham: 1748-1723）が予告した一つの時代精神たる科学の領域との間に立って[31]，ホエィトリーは経済学の自立の方向に向いていたといえよう．本稿では取りあげなかったが，サタンを現世に配剤させる神学と，それを基礎とした人口原理から必然的に生ずる絶対的な貧困と悲惨という像を描く牧師・マルサスでは[32]，自然神学の持っていた楽天性や静態的な社会把握の姿勢は後景に退き，経済学は完全に分離して独自に「憂鬱な科学」への道を歩んだのである[33]．

IV　おわりに

19世紀前半のブリテン社会を把握する知的枠組みには，産業化の過程を受けて経済生活をどのように評価するかを課題にしつつ，ロマン主義，功利主義，自然主義，歴史主義，自由主義，社会主義，福音主義など，さまざまな類型が重なり合いながら共存していた．程度の差はあれペイリー的な自然神学を底流に持つ，一群のキリスト教経済学者達の調和的，静態的，保守的な社会像も，上の諸々の要素を少しずつ含みながらその一つであり，19世紀中頃まで一定の社会的影響力を持っていた．しかし，デザ

30）仮に内面でつながりがあるとしても，この関係でのホエィトリーの信仰や神学の役割はほとんど信念に近く，経済学という知の枠組みに論理的に連関しているとは評定しがたい．この点で，神学的側面を依然として強調する深貝やウォーターマンのホエィトリー評価は，自然神学的表現に引きずられて彼の経済学の科学としての自立性把握に胚胎する，神学からの乖離を十分に捉えていない．また，神学から経済学への力点の移行に関連して，ヒューエルによる「ブリッヂウォーター論集」3集（1833）につき「この著作は自然神学という形式をかりて，天文学や自然哲学を普及することを主な目的として書かれたもので…ここに科学を普及する方法が自然神学から科学哲学に移行したヴィクトリア初期の状況が示されている」と評した柏木（1995, 132頁）が示唆的である．同じ時期について，ヒューエル『帰納的科学の歴史』（1837），『帰納法的科学の哲学』（1840）の検討を踏まえて「自然神学が地質上の発見を取り込み，自然を動的（歴史的）に捉えようとする方向に変化している」と自然神学自体が発展していくかのように梅田（1995, 183頁）は特徴づけるが，本稿で見たような自然神学全体の趨勢を考えると，柏木の見解がより妥当と思われる．

31）ベンサムは実験と観察と確証という徹底した経験主義的立場から，自然神学のデザイン論について「神の始源の創造の力と，その力が発揮された設計への我々の信仰は…経験によっては確証されない」ものであり「超経験的」で無意味なものと論断する（[Bentham]：1822, p. 97）．なお，ベンサムの宗教批判については有江（1997）を参照のこと．

32）マルサスの神学については橋本（1987）Ⅱ編1章3節，Ⅱ編2章，および柳沢（2000, 100頁）参照．

33）したがって，マルサスを始め，その19世紀版とみなすチャーマーズ，ホエィトリーらのキリスト教経済学を「不平等と貧困への国教会的弁護論の長い伝統」の中に位置づけ，それにヒューエルやジョーンズまで含めて反「リカードゥ派帰納的経済学」連合を展望するCollini, Winch, Burrow（1983, p. 71）は，神学的基礎については妥当であるが，その評価を経済学そのものまで拡張して彼らを一括できるかは疑問である．なお，ヴィクトリア時代の自然，人間，社会の関係を，自然神学と進化論，およびマルサスとダーウィンを軸に整理したYoung（1985）は有益である．

イン論に規定された保守性からは，個別の課題はおいても，少なくとも国教会体制が君臨していたペイリーまでの時代に典型的に見られるように，急進的な政治改革や議会改革への志向性とそれを裏付ける思想は生まれがたいと言わざるをえない[34]．19世紀初頭までの急進的な政治改革思想の代表が，無神論者と言われるベンサムであったのはそうした経緯を象徴的に示しているのではないだろうか．

また，自然神学と社会理論としての経済学との相互関係を見たとき，前者の静態的，固定的な性格と，経済過程の動態的な分析を必須とする後者とは，本来的に整合しがたいと言わざるを得ない．したがって，キリスト教の理念による経済学の包摂が意図されているにしても，経済の分析に力点が移るほどに，その結論と自然神学の性格との乖離があらわになるのである．上に示したチャーマーズやホエィトリーにおいても，神学者として包摂を意図しながら，経済という物質世界の自律的な動きを抽出したり，静態的社会像を越える分析に至るなど，志に反して結果的に神学の枠組みと経済学とのアンビヴァレンスな関係を孕むことになる．更にいえば，両者の乖離や断絶の契機を見ることになる．にもかかわらず，ある程度の影響力を持ったと言われるのは，時代状況とともに，彼らが社会的に認められた高級聖職者ないし知識人であり，したがって救貧政策などにも発言できるだけの位置にいて，しかも神学が「幸福な世界」を描く現状維持的な性格を持っていたためである．その意味で，彼らの経済学自身には古典派経済学のような体系性は期待できず，系統的な経済理論として持続的な影響力を持ったとは考え難い．以上から，19世紀前半の諸改革への影響はともかく，社会理論の中心が古典派ではなく，「メインストリーム」としてのキリスト教経済学であるというウォーターマンの主張には賛同できない（Waterman, 1991, p. 14）．始めから解体の契機を孕んだ，あくまでも過渡的な存在と言うべきである．

さて，すでにブルックを借りて示唆したように（Brooke, 1991; 本稿Ⅱ節末尾），19世紀に至っても歴史的，社会的背景によってブリテンで自然神学が固有の役割を果たしたことは，知性史的に見て特徴的なことである．もともと「啓蒙における類いまれなキリスト教弁護論」（Brooke, 1996, p. 12）であるデザイン論は，よく知られているように，フランスではリスボン大地震（1755）後に，ヴォルテール（Voltaire, Francois Marie Arouet: 1694-1778）の『カンディード』（1759）によって思想的かつ文化的にほぼ葬り去られ[35]，ドイツでは理論理性による神認識の不可能性を指摘したカント（Immanuel Kant: 1724-1804）によって哲学的に論駁されていた[36]．ブリテンでも，ヒューム（David Hume: 1711-1776）の『自然宗教についての対話』（1779）によって哲学的にはデザイン論は打撃を受けていたはずだが，19世紀に入ってから出版されたペイリーの『自然神学』（1802）はヒュームもカントもいなかったように広範に読まれ，「ブリッヂウォーター論集」のような後に続く一群の啓蒙書とともに，中流以上の階層に安心感を与え続けたのである．これに一撃を与えたのが，ダーウィン『種の起源』（1859）であった．自然選択という無目的の偶然のプロ

34）イングランドの代議制が完全な制度であると考えていたペイリーとその時代に関して，神学的異端からこそ政治的な急進主義が醸成されるというJ. C. D. クラークのテーゼを想起されたい．J. C. D. Clark（1985, pp. 277-282）．ベンサムと比較しながらペイリーの保守性を簡潔に強調している泉谷（1998, 122-123頁）も参照のこと．

35）哲学的な直接のターゲットはライプニッツの神義論と最善説である．フランスについては，科学的営為から神を排除するための百科全書派による激烈な知的闘争，「聖俗革命」により，18世紀までに自然神学は命脈を断たれたという村上（1976）の指摘もある．

36）自然神学に基づく神義論は詭弁的であり，実践理性の要請により，つまり信仰によってのみ神の義（ただしさ）に導かれるという，要するに理性と信仰の分離のカント的再版である．

セスが，神の意図によるデザイン論を駆逐してしまったのである．

> 「自然神学は，その最強の支持勢力と考えられていたもの，つまりデザイン論に立つペイリーの議論をダーウィンの自然選択説が断ち切ったときのショックからまだ本当に立ち直っていない」（A.ハーディ『神の生物学』11章，1976年）

そうであるなら，逆に言えば，それだけペイリーの影響力が大きかったことと，ヴィクトリア時代前期のブリテン知的文化が日本人の標準的感覚からするといかに宗教的であり体制維持的であったかを，常に考えるべきなのである．

（了）

本論文は，平成11-13年度科学研究費・萌芽的研究「19世紀英国における自然神学思想と経済思想の関連」（課題番号：11873003）による研究成果の一部である．

文献一覧

Ayala, Francisco J. (2003) 'Intelligent Design: The Original Version', in *Theology and Science,* Vol. 1, No.1, pp.9-32.

[Bailey, Samuel] (1831) *Questions in Political Economy, Politics, Morals, Metaphysics, Polite Literature, and Other Branches of Knowledge,* rpt. ed. (1st 1823), London: Hunter.

[Bentham, Jeremy] (1822) *An Analysis of the Influence of Natural Religion on the Temporal Happiness of Mankind,* by 'Philip Beauchamp', [ed., G. Grote], London: Carlile.

Bowler, Peter J. (1992) *The Fontana History of the Environmental Sciences,* London: Fontana Press.

Brooke, John H. (1991) *Science and Religion: Some Historical Perspectives,* Cambridge: Cambridge University Press.

————(1996) 'Science and Theology in the Enlightenment', in W. M. Richardson and W. J. Wildman (eds.) *Religion and Science: History, Method, Dialogue,* New York & London: Routledge, pp. 7-28.

Chalmers, A. (ed.) (1819) *The Works of William Paley, D. D. with a Life,* 5 vols., London: Rivington, Nunn, Longman and et al.

Chalmers, Thomas (1835) *On the Power, Wisdom and Goodness of God: The Adaptation of External Nature to Moral and Intellectual constitution of Man,.* Bridgewater Treatise I, 2 vols., Glasgow: William Collins.

————(1836a) *Natural Theology, The Works of Thomas Chalmers,* Vol. I-II, Glasgow: William Collins.

————(1836b) *The Application of Christianity to the Commercial and Ordinary Affairs of Life, The Works of Thomas Chalmers,* Vol. VI, Glasgow: William Collins.

Clark, J. C. D. (1985) *English Society 1688-1832: Ideology, Social Structure and Political Practice During Ancien Regime,* Cambridge : Cambridge University Press.

Clarke, M. L. (1974) *Paley: Evidences of the Man,* London: SPCK.

Cole, G. A. (1987) 'Doctrine, Dissent and the Decline of Paley's Reputation, 1805-1825', in *Enlightenment and Dissent,* No. 6, pp.19-30.

Collini, S., Winch, D. and Burrow, J. (1983) *That Nobel Science of Politics: A Study in Nineteenth-Century Intellectual History,* Cambridge: Cambridge University Press.

Crimmins, James E. (ed.) (1998) *Utilitarians and Religion,* Bristol: Thoemmes Press.

Dawkins, Richard (1987) *The Blind Watchmaker: Why the Evidence of Evolution Reveals a Universe Without Design,* New York: W.W. Norton.

Dennis, B. and Skilton, D. (1987) *Reform and Intellectual Debate in Victorian England,* London: Croom Helm.

Dictionary of National Biography (1996) CD-ROM edition, Oxford: Oxford University Press.

Dillenberger, John (1988) *Protestant Thought and Natural Science: A Historical Interpretation,* new ed., (1st ed. 1960), Nortre Dame (IN): University of Nortre Dame Press.

Foley, Tadhg (1995) 'Pirates, Professors, and Political Economy', *Irish Reporter* (Third Quarter), pp.6-7.

Gascoigne, J. (1988) 'From Bentley to the Victorians: The Rise and Fall of British Newtonian Natural Theology', in *Science in Context,* No. 2, pp. 219-256.

Gilley, Sheridan (1994) 'Industrialization, Empire, Identity: The Church of England 1800-1900', in Sheridan Gilley & W. J. Sheils (eds.) (1994) *A History of Religion in Britain:*

Practice and Belief From Pre-Roman Times to the Present, London: Routledge.

Gillispie, Charles C. (1959) *Genesis and Geology: A Study in the Relations of Scientific Thought, Natural Theology, and Social Opinion in Great Britain 1790-1950,* (1st. 1951), New York: Harper Torch Books.

Hardy, Alister C. Sir (1976) *The Biology of God: A Scientist's Study of Man, the Religious Animal,* New York: Taplinger. アリスター・ハーディ，長野敬・中村美子訳『神の生物学』紀伊國屋書店，1979年.

Hilton, Boyd (1988) *The Age of Atonement: the Influence of Evangelicalism on Social and economic Thought, 1785-1865,* Oxford: Clarendon Press.

Hurbutt III, Robert H. (1985) *Hume, Newton, and the Design Argument,* revised ed., Lincoln: University of Nebraska Press.

Jacob, Margaret (1976) *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720,* New York: Cornell University Press. マーガレット・ジェイコブ，中島秀人訳『ニュートン主義者とイギリス革命』学術書房，1990年.

Lalor, John (1852) *Money and Morals: A Book for the Times,* London: John Chapman.

LeMahieu, D. L. (1976) *The Mind of William Paley: A Philosopher and His Age,* Lincoln: University of Nebraska Press.

Mayr, Ernst (1991) *One Long Argument: Charles Darwin and the Genesis of Modern Evolutionary Thought,* Cambridge (MA): Cambridge University Press. エルンスト・マイアー，養老孟司訳『ダーウィン進化論の現在』岩波書店，1994年.

McIver, Tom (1988) 'Formless and Void: Gap Theory Creationism', *Creation/Evolution,* Vol. 8, No. 3, pp. 1-24.

Meadley, George. W. (1810) *Memoirs of William Paley, D. D.,* 2nd ed., Edinburgh: Gradock & Joy.

McFarland, Thomas (1969) *Coleridge and the Pantheist Tradition,* Oxford: Clarendon Press.

McGrath, Alister E. (1999) *Science & Religion: An Introduction,* London: Blackwell.

Mossner, E.C. (1936) *Bishop Butler and the Age of Reason,* London: Macmillan.

Noll, Mark (1997) 'Thomas Chalmers (1780-1847) in North America (1830-1917)', *Church History,* No. 66, pp. 762-777.

———— (2001) 'Protestant Reasoning about Money and the Economy, 1790-1860: A Preliminary Probe', in Mark Noll (ed.) *God and Mammon: Protestant, Money, and the Market,* Oxford: Oxford University Press, pp.265-294.

Norman, E.R. (1976) *Church and Society in England 1770-1970,* Oxford:Clarendon Press.

Pfeifer, E.J. (1988) 'Darwinism in the United States', in Thomas F. Glick (ed.) *The Comparative Reception of Darwinism,* 1st., 1974, Austin & London: University of Texas Press, pp. 168-226.

Paley, William (1819a) *The Principle of Moral and Political Philosophy* (1st ed. 1785), in Chalmers (1819) Vols. 1-2.

————(1819b) *A View of the Evidences of Christianity* (1st ed. 1794), in Chalmers (1819) Vol. 3.

————(1819c) *Natural Theology* (1st ed. 1802) in Chalmers (1819) Vol. 4.

Review Article III (1803) *'Natural Theology; or, Evidence of the Existence and Attributes of the Deity, collected from the appearance of Nature.* By William Paley, D. D. Archdeacon of Carlistle, London, 1802. 8vo. pp. 586,' in *Edinburgh Review* Vol. 1 (Oct. 1802- Jan. 1803), pp. 287-305.

Rice, Daniel L. (1971) 'Natural Theology and the Scottish Philosophy in the Thought of Thomas Chalmers', *Scottish Journal of Theology,* Vol. 24, 23-46.

Sumner, John Bird (1816) *A Treatise on the Records of Creation,* London: J. Hatchard.

Walton, Mary (1948) *Sheffield: Its Story and its Achievements,* Sheffield: The Sheffield Telegraph & Star Limited.

Waterman, A.M.C. (1991) *Revolution, Economics & Religion: Christian Political Economy 1798-1833,* Cambridge: Cambridge University Press.

Whately, Richard (1832) *Introductory Lectures on Political Economy,* (1st 1832) Second and enlarged edition, London: B. Fellowes.

————(1857) *Introductory Lessons on Morals, and Christian Evidences,* Cambridge (MS): J. Bartlett.

Young, Robert M. (1985) *Darwin's Metaphor: Nature's Place in Victorian Culture,* Cambridge & New York: Cambridge University Press.

有江　大介（1997）「ベンサムの宗教批判と快楽主義的人間像——ベンサム社会科学の方法——」『経済系』（関東学院）193号，19-33頁.

石田　好治（2003）「自由主義放任主義と摂理論——ジェイコブ・ヴァイナーとボイド・ヒ

ルトンの所説を与件として――」『政策科学』10巻2号，111-119頁．
泉谷周三郎（1998）「ベンサム，J.S.ミルと宗教」，泉谷周三郎他編著『イギリス思想の流れ：宗教・哲学・科学を中心として』北樹出版，114-129頁．
鵜浦　裕　（1992）「創造論の洪水におぼれるか，進化論」，『UP』239号，1-5頁．
――――（1998）『進化論を阻む人々：現代カリフォルニアの創造論運動』勁草書房．
梅田　淳　（1995）「一九世紀イギリスにおける紳士教育と科学」，吉本・川崎（1995），159-191頁．
大村　照夫（2002）「ウィリアム・ペイリーの義務論」『名古屋学院大学論集（社会科学編）』39巻1号，1-12頁．
柏木　肇　（1995）「和しつ諍う知の司祭――ヴィクトリア科学　序曲――」，吉本・川崎（1995），112-158頁．
中矢俊博・柳田芳伸　編著（2000）『マルサス派の経済学者たち』日本経済評論社．
橋本比登志（1987）『マルサス研究序説』嵯峨野書院．
――――（1988）「『自然神学』（1802）以前のW.ペイリーの自然神学」『経済学論究』関西学院大学，42巻2号，23-46頁．
――――(1989)「W.ペイリーの人口論と経済思想――マルサスとの関連において――」，久保・真実・入江編著『スミス・リカードウ・マルサス』創元社，133-155頁．
深貝　保則（1996）「神学的経済学の商業社会把握――マルサス，チャーマーズ，ホェイトリー――」『マルサス学会年報』6号，1-21頁．
――――（1997）「チャーマーズにおける人口3区分論と生産構造把握」『経済論叢』（神奈川大学）32巻2号，1-40頁．
――――（2000）「ホェイトリーの文明社会論」，中矢・柳田（2000），105-135頁．
プレン，ジョン（1994）『マルサスを語る』溝川喜一・橋本比登志編訳，ミネルヴァ書房．
松永　俊男（1996）『ダーウィンの時代――宗教と科学――』，名古屋大学出版会．
村上陽一郎（1976）『近代科学と聖俗革命』新陽社．
柳沢　哲哉（2000）「J.B.サムナーとマルサス」，中矢・柳田（2000），81-104頁．
――――（2003）「タウンゼンドの救貧法批判」永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦編著『マルサス理論の歴史的形成』昭和堂所収，199-223頁．
横山　利明（1979）『進化論の人文科学』宝文館出版．
横山　輝雄（1997）『生物学の歴史』放送大学教育振興会．
吉本秀之・川崎勝他　編著（1995）『科学と国家と宗教』平凡社．
渡辺　正雄　編著（1984）『ダーウィンと進化論』共立出版．

（横浜国立大学大学院国際社会科学研究科教授）